ISSN 0385-9487

東洋學論叢

「東山法門」の人々の傳記について（中）　伊吹　敦　（1）

Paṭhamasambodhi 第一四章 Parinibbānakathā訳注研究(2)　岩井　昌悟　（136）

マットゥール村訪問記 ―現代サンスクリット事情の一端―　沼田　一郎　（147）

『ゴーラクナート語録』研究 ―「サブディー」（一五一～二六七）の本文と和訳―　橋本　泰元　（176）

東洋大学文学部紀要第63集

インド哲学科篇

XXXV

研究室報告

① 本年度は、新入生歓迎行事として四月二十六日に「金鳳山平林禅寺（平林寺）参禅研修」を行った。普段公開されていない中庭で散策を楽しむなど、たいへん貴重な機会を頂戴し、新入生には大いに好評で、学生相互あるいは教員との交流を深めることができた。関係各位には厚く御礼申し上げます。

② 本年度も五月三十日に「東洋大学文学部伝統文化講座」の一環として、インド哲学科主催、東洋大学仏教会・仏教青年会協力、中世文学会共催にて、俳優・滝田栄氏による「公開講演：私と仏教」と真言宗豊山派迦陵頻伽聲明研究会の皆様による「聲明公演：語りの源流　涅槃会　釈尊への追慕」を開催した。また十二月十二日には「第二回東洋大学インド祭」を開催した。平成七年度本学科卒業生の森山繁氏（シゲジー）をはじめとする、たくさんの出演者の皆様の好演を賜った。出演者の皆様には厚く御礼申し上げます。

③ 竹村牧男教授が文学部長の職を辞し、平成二十一年九月十一日付をもって学長に就任した。

④ 本年度、特別講義を行った外国の先生は左記の方である。張文良博士（中国人民大学副教授）「中国の仏教と仏教研究」、平成二十一年十一月十二日、三時限
ラーラン・プラサード・スィンフ博士（元マガダ大学教授・現デリー大学大学院哲学専攻客員研究員）「タントラの宗教について」、平成二十一年十一月十二日、五時限

⑤ 本年度も大学院の公開研究発表会を春学期（七月一日）と秋学期（十一月二十五日）に開催した。前期の発表者は、藤森晶子（M2）、永田道子（M2）、三澤祐嗣（D1）、藤山覚一郎（D2）、鈴木貫太（D3）、馬場えつこ（D3）の六名、後期の発表者は、三ツ谷義久（M2）、狩野久枝（M2）、藤森晶子（M2）、藤岡哲（M2）、朝日透（M2）、オーダム（D3）、栗原正和（D3）の七名であった。
尚、前期の研究発表会では平成二十年度に学位を取得した伊東昌彦氏による博士論文「三論浄土教の研究 ― 吉蔵の浄土思想と三論宗」の報告会を併せて開催した。

⑥ 本年度のティーチングアシスタントは、藤岡哲、板野義弘、鈴木貫太、馬場えつこの各氏が担当した。

⑦ 本年度の卒業論文・制作の提出者は、Ⅰ部が四七名、Ⅱ部が一〇名であり、大学院の修士論文提出者は四名であった。本年度の優秀論文に対する褒賞は左記の通りである。
・校友会奨学基金：小倉麻由（Ⅰ部）、安藤裕美（Ⅱ部）、藤森晶子（大学院）
・勧学奨学基金：関口定子（Ⅰ部）、須藤美喜子（Ⅱ部）
・田村芳朗奨学基金：島田緒理絵（Ⅱ部）、髙山玲子（Ⅱ部）

平成二十一年度業績（平成二十一年一月～十二月）

竹村牧男

〈著書〉

『入門　哲学としての仏教』（単著、講談社現代新書、平成二十一年四月二十日、二六二頁）

『『成唯識論』を読む』（単著、春秋社、平成二十一年五月二十日、五六四頁）

『『華厳五教章』を読む』（単著、春秋社、平成二十一年十一月二十日、二九一頁）

〈論文〉

「学問と社会および宗教学と現代」（単著、『宗教研究』三五九号、日本宗教学会、平成二十一年三月三十日発行、一七～三六頁）

「仏教の環境観」（単著、『「エコ・フィロソフィ」研究』第三号、東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ、平成二十一年三月三十日、一三～二六頁）

「共生への一視点 ― 空海における自他の構造」（単著、『共生思想研究年報二〇〇八』、平成二十一年三月三十一日、六五～七四頁）

「仏教と文学 ― 冬の美学と道元の禅世界」（単著、『宗教と文学―神道・仏教・キリスト教』、アウリオン叢書〇七、白百合女子大学　言語・文学研究センター、平成二十一年十二日一日、六七～八二頁）

〈その他〉

「仏教の心の見方に学ぶ」（単著、*THE LUNG perspectives*, Vol. 17, No. 2.「医療と哲学」第二四回、メディカルレビュー社、平成二十一年四月十日、八八～九二頁）

「仏教の「知」に魅せられて」（単著、『本』五月号、講談社、平成二十一年五月一日、二五～二七頁）

「いのちのありか ― 浄土の教えに尋ねて」（単著、『あんじゃり』第一七号、親鸞仏教センター、平成二十一年六月一日、三〇～三一頁）

「大悲ものうきことなし」（単著、『在家仏教』十月号、在家仏教協会、平成二十一年十月一日、一二～三七頁）

インタビュー「環境は自己であると捉える仏教の自然観」（単著、『光の泉』十月号、日本教文社、平成二十一年九月十五日、一〇～一五頁）

「『公案』復刊によせて」（単著、秋月龍珉『公案　実践的禅入門』、ちくま学芸文庫、平成二十一年十一月十日刊、三四七～三四九頁）

「月に心を澄ませる」（単著、『サステナ』第一〇号、サステイナビリティ学連携研究機構、平成二十一年一月二十日、四四～四五頁）

「かそけき風を聴く」（単著、『サステナ』第一一号、サステイ

ナビリティ学連携研究機構、平成二十一年四月二十日、五八〜五九頁）
「阿修羅に想う」（単著、『サステナ』第一二号、サステイナビリティ学連携研究機構、平成二十一年七月二十日、五二〜五三頁）
「地球が滅びる時に」（単著、『サステナ』第一三号、サステイナビリティ学連携研究機構、平成二十一年十月二十日、五四〜五五頁）

＜書評＞

奈良康明・山崎龍明『なぜいま「仏教」なのか』（春秋社、平成二十一年七月刊）、『中外日報』、平成二十一年八月二十七日号

＜学会活動＞

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会（評議員）／日本宗教学会（理事）／比較思想学会（理事）／仏教思想学会（理事）／東方学会（会員）

研究発表等

地球システム・倫理学会、第五回学術大会シンポジウム「地球生命を共に生きる叡智と倫理」において、コーディネーターを務める。平成二十一年六月二十七日、大正大学

共生社会システム学会平成二十一年度大会シンポジウム「環境共生社会創造のための教育・人づくり」において、座長を務める。平成二十一年八月一日、茨城大学農学部（茨城県阿見町）

「仏教と神秘主義 ― 禅と密教を中心に」、平成二十一年度東西宗教交流学会、平成二十一年八月三十一日〜九月二日（発表は、九月一日）、ザ・パレスサイドホテル（京都市）

「日本仏教とエコ・フィロソフィ」、日本宗教学会第六八回学術大会、平成二十一年九月十一日〜十三日（発表は十三日）、京都大学

「『成唯識論』の縁起思想について」、駒澤大学仏教学会　平成二十一年度第一回公開講演会、平成二十一年十月三日、駒澤大学大学会館（世田谷区駒沢）

「自己と曼荼羅とサステイナビリティ」、東洋大学 TIEPh・茨城大学 ICAS 共催国際セミナー「持続可能な発展と自然・人間 ― 西洋と東洋の対話から新しいエコ・フィロソフィを求めて」、平成二十一年十月十日、東洋大学スカイホール（白山キャンパス二号館一六階）

「宗教的「個」の普遍的構造を求めて」、宗教間対話研究所第二九回月例研究会（峯岸正典所長）、平成二十一年十月十五日、東京グランドホテル（港区・芝）

「多元化社会の宗教哲学 ― 仏教から西田哲学へ」、第七一回上智大学哲学会大会シンポジウム「現代の宗教哲学」、平成二十一年十月十八日、上智大学七号館一四階特別会議室（四谷）

「『成唯識論』の縁起思想について」、共生思想の可能性についてのワークショップ、平成二十一年十月二十三日、ソウ

ル・東国大学
「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ主催国際シンポジウム「日本発のエコ・フィロソフィを求めて」において、コーディネーターを務める。平成二十一年十一月二十八日、井上円了ホール

講演
「華厳浄土への憧れ」、東大寺文化講演会、平成二十一年五月二十九日、東京・有楽町朝日ホール（マリオン一一階）
「仏教の環境観」、在家仏教協会講演会、平成二十一年七月二十五日、大手町ビル
「空海の思想について」、素修会（日本工業倶楽部）、平成二十一年七月二十七日、日本工業倶楽部（丸の内）
「哲学としての仏教」、朝日カルチャーセンター、平成二十一年七月二十五日、東京・新宿住友ビル
「サステイナビリティと日本の共生思想 ― 哲学からの発想」、千葉商科大学晴耕塾、平成二十一年七月二十九日、千葉商科大学ギャラリー（丸の内・国際ビル）
「一人子のように慈しむべし ― 仏教の自他不二の思想から」、第一回神儒仏三教合同シンポジウム「他者への関心～秋葉原無差別殺傷事件を受けて～ 心の通い合う社会を求めて」、神田明神・斯文会・東方研究会主催、平成二十一年八月八日、湯島聖堂
「エコ・フィロソフィ ― 自己と自然の関係へのまなざし」、文京区環境政策課主催・ＮＰＯ法人環境ネットワーク・文京企画運営：平成二十一年度環境学習リーダー育成講座、平成二十一年十一月五日、アカデミー文京学習室（シビックセンター地下一階、文京区春日）
「共生思想の歩みと課題」、東洋大学校友会埼玉県支部創立八〇周年、東・西支部発足五周年記念講演会、平成二十一年十一月十四日、東洋大学白山校舎六号館、六二一〇番教室

＜研究プロジェクトへの参加＞
東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（TIEPh）・自然観探究ユニット代表者（機構長：松尾友矩［東洋大学］）
東洋大学共生思想研究センター長

＜教育活動＞
学内担当科目
学　部：日本仏教史（Ⅰ部。春学期のみ）
インド学仏教学演習⑦（Ⅰ部）
宗教をめぐる諸問題Ａ（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）一回担当「日本仏教における行為について ― 道元を中心に」（平成二十一年四月二十五日、六時限）
大学院：日本仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ（前期課程）
仏教学特殊研究Ⅳ・仏教学研究指導Ⅲ（後期課程）
学外担当科目
上智大学文学部：仏教思想Ⅰ・Ⅱ

＜大学・学部管理・運営活動＞
文学部長／学長　評議員　理事／東洋学研究所研究員
＜公開講座＞
「禅的生活における私と他者」、共生という生き方 ― 日本・中国・日インドの生活文化、第一回、十月七日
「大乗仏教における女性たち」、東洋大学生涯学習センター公開講座・エクステンション講座B＜東洋思想への誘い ― インド哲学・仏教のエッセンスを探る、第三回、十月十七日

宮本久義

＜論文＞
「『マツヤ・プラーナ』第一八四章：和訳と註解― 『マツヤ・プラーナ』所収の「ヴァーラーナスィー・マーハートミヤ」について（3）」（『東洋学論叢』第三四号＜「東洋大学文学部紀要」第六二集＞、平成二十一年三月三十日、一～一五頁）
「インドにおける宗教間共生への課題 ― ヒンドゥー教の祭礼ラーム・リーラーの考察に基づいて」（単著、『共生思想研究年報二〇〇八』東洋大学共生思想研究センター、平成二十一年三月三十一日、七五～八一頁）
＜その他＞
Ramesh Kumar Pandey, Sanskrit and Co-existence の和訳、ラメーシュ・クマール・パーンデー「サンスクリットと共生」、（単著、『共生思想研究年報二〇〇八』東洋大学共生思想研究センター、平成二十一年三月三十一日、一一三～一一六頁）
Ramesh Kumar Pandey, Tolerance: The Mantra for Peace and Happiness の監訳、ラメーシュ・クマール・パーンデー「寛容 ― 平安と幸福のためのマントラ」（単著、『共生思想研究年報二〇〇八』東洋大学共生思想研究センター、平成二十一年三月三十一日、一二一～一二八頁）
＜学会活動＞
所属学会ならびに役職
日本南アジア学会（平成二十一年十月より、事務局長）／日本印度学仏教学会（評議員）／日本宗教学会（会員）／日本佛教学会（会員）／建築史学会（会員）／早稲田大学東洋哲学会（会計監査）
国際サンスクリット学会に参加（平成二十一年九月一～五日、京都大学）
研究発表
「ヒンドゥー聖地と環境問題」（日本宗教学会学術大会シンポジウム、平成二十一年九月十三日、京都大学）
「宗教と共生 ― インドの多元的社会からみた共生の問題」（東洋大学共生思想研究センター・シンポジウム、平成二十一年十一月二十一日、東洋大学白山キャンパス）
＜調査活動＞
「インド・ヒンドゥー聖地（バナーラス・ジャイプル）調査」（東洋における聖地信仰の研究：ヒンドゥー教と仏教における

聖地巡礼成立の要件」プロジェクト、平成二十一年七月十八日〜二十六日、インド・バナーラス、デリー・ジャイプル）
「大韓民国の東国大学（東洋大学の協定校）における共生思想ワークショップ参加と両大学間学術交流促進の協議」（東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ、平成二十一年十月二十二〜二十四日、韓国・東国大学）

＜研究プロジェクトへの参加＞

「東洋における聖地信仰の研究：ヒンドゥー教と仏教における聖地巡礼成立の要件」平成二十一年度東洋大学東洋学研究所学術プロジェクト、研究代表者としてインド思想・宗教における聖地信仰の研究とプロジェクト全体の統括に従事
「東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ、サステイナビリティ学連携研究機構（TIEPh）」（研究員、機構長：松尾友矩［東洋大学］）自然観探究ユニットに属し、「インドの自然観」の研究を行う
「東洋思想に基づく「共生学」の構築」東洋大学共生思想研究センター（研究員、センター長：竹村牧男［東洋大学］）「古代インド哲学思想と共生思想の研究」を行う
「多言語重層構造をなすインド文学史の先端的分析法と新記述（科学研究費・基盤A）」（連携研究者、代表：水野善文［東京外国語大学］）古典文学研究班に所属しサンスクリット文学の研究を行う

＜教育活動＞

学内担当科目

学　部：インド古典哲学A・B（Ⅰ部）
　　インド現代思想（Ⅱ部）
　　現代インド（Ⅱ部）
　　ヨーガとアーユルヴェーダ（Ⅰ部）
　　インド学仏教学演習②（Ⅰ部）
　　インド学仏教学演習⑨（Ⅱ部）
　　全学総合ⅠA（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）一回担当
　　「妖怪学―インドにも百鬼夜行が」（六月二十三日）
　　全学総合ⅠA（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）一回担当
　　「インド思想とエコ・フィロソフィ」（六月五日）
　　宗教をめぐる諸問題A（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）
　　「ヒンドゥー教における行為の問題―人はいかに生きるべきか」（六月二十七日）
大学院：サンスクリット文献研究Ⅰ・インド哲学研究指導Ⅰ（前期課程）
　　インド哲学特殊研究Ⅰ・インド哲学研究指導Ⅰ（後期課程）

学外担当科目

総合講座「東洋医学の人間科学」中、「ヨーガとアーユルヴェーダ」を担当（早稲田大学人間科学部、平成二十一年十一月十三日・十一月二十日）

＜社会的活動＞
講演「再考 ― インド人の思考法」宗元会、平成二十一年二月一八日、機械振興会館
講座「人はなぜ聖地巡礼に赴くのか―カイラースとバナーラスを例として」、東洋大学生涯学習センター・エクステンション学習講座B「東洋思想への誘い」、平成二十一年五月十六日、東洋大学白山キャンパス
講座「ヨーガに学ぶ心身の健康」、東洋大学生涯学習センター・エクステンション学習講座B「共生という生き方―日本・中国・インドの生活文化」、平成二十一年十月二十八日、東洋大学白山キャンパス
＜大学・学部管理・運営活動＞
大学院文学研究科仏教学専攻主任／キャリア形成支援委員会委員、東洋学研究所研究員・運営委員／東洋大学共生思想研究センター研究員・運営委員／東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ、サステイナビリティ学連携研究機構（TIEPh）研究員

橋本泰元

＜論文＞
「『ゴーラクナート語録』研究―「サブディー」（一〇一～一五〇）の本文と和訳」（単著、『東洋学論叢』第三十四号＜東洋大学文学部紀要第六十二集＞平成二十一年三月三十日、一三二～一四七頁）
「ヒンドゥー教とイスラーム教の聖所の交渉と宗教的アイデンティティ ― 両者の「共生」の視点から」（単著、『共生思想研究年報二〇〇八』平成二十一年三月三十一日、八三～九八頁）
＜その他＞
「ヒンドゥー教とイスラーム教の『共生』―『周縁』」の視点から」（単著、Kyousei-Newsletter-（Vol.7／2009.9.30）、一～四頁）
＜学会活動＞
所属学会ならびに役職
日本印度学佛教学会（理事）／日本宗教学会（会員）／日本南アジア学会（会員）／日本佛教学会（会員）
研究発表・シンポジウム
「中世ヒンドゥー教にみる『地上の天界』説と環境倫理」（パネルテーマ「宗教とエコ・フィロソフィ―東洋の宗教伝統を中心として」日本宗教学会第六八回学術大会、平成二十一年九月十三日、京都大学）
＜調査活動＞
「ヒンドゥー教最大の聖地とされるバナーラス市におけるイスラーム聖廟での民間信仰レベルにおけるヒンドゥー教徒とイスラーム教徒との「共生」の実地調査および関連文献蒐集」（東洋大学共生思想研究センター、平成二十一年七月十八日～二十四日）

＜学術交流＞
「大韓民国私立東国大学（東洋大学協定校）における共生思想ワークショップ参加および両大学学術交流促進の協議」（東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ、平成二十一年十月二十二日～二十四日、ソウル・東国大学仏教文化研究所）
＜研究プロジェクトへの参加＞
「多言語重層構造をなすインド文学史の先端的分析法と新記述」＜平成二十一年度科学研究費補助金［基盤研究（A）］研究代表者：水野善文［東京外国語大学］連携研究者＞
「ヒンディー・ウルドゥー韻律のリズム構造の解明 ― ペルシア起源説の検証をとおして」＜平成二十一年度科学研究費補助金［基盤研究（B）］研究代表者：長崎広子［大阪大学］研究分担者＞
「東洋における聖地信仰の研究：ヒンドゥー教と仏教における聖地巡礼成立の要件」（平成二十一年度東洋大学東洋学研究所学術プロジェクト、研究代表者：宮本久義［東洋大学］、研究分担者）
東洋大学共生思想研究センター研究員（センター長：竹村牧男［東洋大学］）
東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（TIEPh）研究員（機構長：松尾友矩［東洋大学］）

＜教育活動＞
学内担当科目
学　部：インド学仏教学への誘いB（Ⅱ部）
インドの宗教A・B（Ⅰ・Ⅱ部）
ヒンディー文献講読A・B（Ⅰ部）
インド学仏教学演習③（Ⅰ部）
宗教をめぐる諸問題B（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）一回担当
「バクティと社会」（十一月二十八日、六時限）
文学部伝統文化講座「聲明講演」（五月三十日主催）
校友会寄附講座（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）一回担当
「哲学館初期のカリキュラムの特色 ― 哲学を如何に教育するのか」（七月十一日、五時限）
大学院：インド哲学研究Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅲ（前期課程）
インド哲学特殊研究Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅱ（後期課程）
学外担当科目
大正大学学部：ヒンディー語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ
＜大学・学部管理・運営活動＞
自然科学委員会委員／教職課程運営委員会委員／文学部外国語委員会委員／東洋学研究所研究員／東洋大学共生思想研究センター運営委員

〈社会的活動〉
団体役員等
大法輪石原育英会評議員

渡辺章悟

〈著書〉
『般若心経 ― テクスト・思想・文化』（単著、大法輪閣、平成二十一年二月、三七六頁）
『金剛般若経の研究』（単著、山喜房仏書林、平成二十一年三月、五九一頁）
『金剛般若経の梵語資料集成』（単著、山喜房仏書林、平成二十一年三月、一三一頁）

〈論文〉
The Role of Destruction of the Dharma and Predictions in Mahāyāna Sūtras: With a Focus on the *Prajñāpāramita Sūtras*, *Acta Asiatica* No.96, The TŌHŌ Gakkai (The Institute of Eastern Culture), 2009.2, pp.77-97.（単著）
「インド思想における共感と共苦」（単著、『共生思想研究年報二〇〇八』、東洋大学共生思想研究センター編、平成二十一年三月、五一～五六頁）
「失われる共生、求められる共生」（単著、『天台学報』五一号、平成二十一年三月、二一～三七頁、平成二十年度天台宗教学大会基調講演〈教学大会の共通テーマ：現代社会と仏教〉）

〈その他の業績〉
「お経の真意 ― 経典の現代語訳」（単著、『歴史読本』「入門神様・仏様の信仰事典」、新人物往来社、第四五巻二号、平成二十一年二月、一七二～一七七頁）
「大乗仏教論」（単著、『仏教文化』第一四〇号、東京国際仏教塾、平成二十一年八月十日、一～一五頁）
「彼岸会と再生」（単著、『比叡山時報』第六四九号、平成二十一年三月八日、四～五頁）
「花まつり」（単著、『比叡山時報』第六五〇号、平成二十一年四月八日、三頁）
「護摩供」（単著、『比叡山時報』第六五一号、平成二十一年五月八日、三頁）
「安居」（単著、『比叡山時報』第六五二号、平成二十一年六月八日、三頁）
「施餓鬼」（単著、『比叡山時報』第六五三号、平成二十一年七月八日、三頁）
「塔婆」（単著、『比叡山時報』第六五四号、平成二十一年八月八日、三頁）
「臨終」（単著、『比叡山時報』第六五五号、平成二十一年九月八日、三頁）
「中陰」（単著、『比叡山時報』第六五六号、平成二十一年十月八日、三頁）
「六斎日」（単著、『比叡山時報』第六五七号、平成二十一年十

一月八日、三頁）
「百八煩悩」（単著、『比叡山時報』第六五八号、平成二十一年十二月八日、三頁）

＜学会活動＞

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会（理事・常務委員・評議員・企画編集委員）／日本西蔵学会（委員）／日本宗教学会（会員・プログラム委員会委員）／日本佛教学会（会員）／仏教思想学会（会員）／東アジア仏教学会（会員）／日本南アジア学会（会員）／国際仏教学会IABS（会員）／国際真宗学会（会員）

研究発表・シンポジウム

「輪廻と解脱 ― インド仏教の自然観再考」、パネルのテーマ「宗教とエコ・フィロソフィ ― 東洋の宗教伝統を中心として」の代表者、日本宗教学会第六八回学術大会、平成二十一年九月十三日、京都大学

「老年期における仏教」、パネリストとして参加、シンポジウムテーマ「日本の老年期における死と孤独」、東洋学研究所シンポジウム、平成二十一年十一月二日、東洋大学甫水会館二階

「共生とアイデンティティ ― 国際化社会に関わる現代社会の問題」、共生思想研究センター第四回公開シンポジウムで司会を務める、平成二十一年十一月二十日、東洋大学白山校舎スカイホール

学会・調査

国際真宗学会に参加、六月十二日～十四日、龍谷大学大宮校舎

北海道印仏学会第二五回学術大会に参加、八月二十九日

日本印度学仏教学会第五九回学術大会に参加（理事会及び研究発表）、九月三日～五日、大谷大学）

日本宗教学会第六八回学術大会に参加、（九月十二日～十三日、於京都大学吉田キャンパス、平成二十二年度学術大会プログラム委員会及び研究発表）

東国大学仏教学研究所との学術交流、十月二十二日～二十四日、ソウル・東国大学

韓国東国大学と共生思想センターとのワークショップに参加（十月二十二日～二十四日、於韓国・東国大学）

日本西蔵学会第五七回学術大会に参加（十一月六～七日、於神戸外国語大学、委員会・総会・研究発表）

＜研究助成＞

平成二十年度文科省研究成果公開促進費の助成（学位論文『金剛般若経の研究』の刊行、山喜房仏書林、平成二十一年三月、五九一頁）

平成二十年度東洋大学特別研究の助成（『金剛般若経の梵語資料集成』の刊行、山喜房仏書林、平成二十一年三月、一三一頁）

＜研究プロジェクトへの参加＞

東洋大学共生思想研究センター研究員（センター長：竹村牧男

［東洋大学］）
東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（TIEPh）研究員（機構長：松尾友矩［東洋大学］）
「チベット・ポタラ宮所蔵梵本『維摩経』に基づく総合的研究」（文科省科学研究費［基盤研究（B）］、研究代表者：多田孝文［大正大学］、研究分担者）
「仏教用語の『日英基準訳語集』構築に向けての総合的研究」（文科省科学研究費［基盤研究（A）］、研究代表者：斎藤明［東京大学］、研究分担者）

＜教育活動＞

学内担当科目

学　部：ブッダの思想とその展開A・B（Ⅰ・Ⅱ部）
大乗仏教の思想（Ⅱ部）
インド学仏教学演習④（Ⅰ部）
文学部総合科目Ⅰ（Ⅰ・Ⅱ部共通）
宗教をめぐる諸問題B（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）一回担当
「大乗教団のなぞ」（十月十七日、六時限）
校友会寄附講座（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）五回担当ならびに全体責任者
「井上円了は何を目指し、何を実現しようとしたか ― その生涯と実践」（四月十一日、五時限）
「井上円了が受けたカルチャーショック ― 円了は海外で何を見、何を考えたのか」（七月十八日）
「講義のまとめ」（七月二十五日）
「社会で活躍する校友たち―芸能界・文学界」（十二月五日）
「講義のまとめ」（一月十六日）
大学院：大乗仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ（前期課程）
仏教学特殊研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ（後期課程）

＜大学・学部管理・運営活動＞

井上円了賞選考委員／東洋学研究所（研究所員・『東洋学』編集委員）／共生思想研究センター研究員／東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（TIEPh）研究員

＜社会的活動＞

（財）仏教伝道協会・英訳大蔵経編集委員会（委員）・仏教聖典編集委員会（委員）／（財）全日本仏教会国際交流審議会（委員）／（財）東方研究会（研究員）／（財）大法輪奨学生選考委員会（委員）

＜特別講義・公開講座＞

「大乗仏教概論」東京国際仏教塾特別講義、於東京大学仏教青年会会館、平成二十一年六月十一日
「『般若心経』とはどのような経典か」（平成二十一年度現職教師研修会、曹洞宗群馬県宗務所主催、於ホテル天坊・伊香保）、平成二十一年六月二十六日
「経典は音楽だ ― 仏教の言葉」学びライブ・東洋大学主催、於東洋大学白山校舎六号館、六月二十八日

伊吹　敦

＜論文＞

「「東山法門」の人々の傳記について（上）」（単著、『東洋学論叢』第三四号＜「東洋大学文学部紀要」第六二集＞、平成二十一年三月三十日、一～四八頁）

「墓誌銘に見る初期の禅宗（下）」（単著、『東洋学研究』第四六号、平成二十一年三月三十日、三〇六～三二二頁）

「「戒律」から「清規」へ―北宗の禅律一致とその克服としての清規の誕生」（単著、『日本佛教学会年報』第七四号、平成二十一年七月二十日、四九～九〇頁）

＜その他＞

「禅僧と士大夫（上）　要説・中国禅思想史　二〇」（単著、『禅文化』二一一、平成二十一年一月二十五日、四五～五二頁）

「禅僧と士大夫（中）　要説・中国禅思想史　二一」（単著、『禅文化』二一二、平成二十一年四月二十五日、一三八～一四五頁）

「禅僧と士大夫（下之上）　要説・中国禅思想史　二二」（単著、『禅文化』二一三、平成二十一年七月二十五日、一二六～一三三頁）

「禅僧と士大夫（下之下）　要説・中国禅思想史　二三」（単著、『禅文化』二一四、平成二十一年十月二十五日、一一七～一二四頁）

＜学会活動＞

所属学会ならびに役職

日本佛教学会（理事）／東アジア仏教研究会（役員）／日本印度学仏教学会（会員）／早稲田大学東洋哲学会（会員）／財団法人東方学会（会員）

研究発表

「慧安の傳記について」、日本印度学仏教学会第六〇回学術大会、平成二十一年九月八日、大谷大学

「東山法門的特性和修行法以及觀法的意義」、東亞的靜坐傳統國際研討會、平成二十一年十月三十一日、法鼓佛教學院（中華民国、台北県金山郷）

「禪師的療效 ― 禪宗的登場及以人們對禪師的期?之變化」、MONK AND MEDICINE: A MONK'S IMAGE AND FUNCTIONS AS A HEALER（藥師信仰與佛教文化國際學術研討會）、平成二十一年十二月十二日、順縁会館（中華人民共和国、河北省唐山市）

＜教育活動＞

学内担当科目

学　部：中国仏教のあゆみA・B（Ⅰ・Ⅱ部）

禅の思想（Ⅱ部）

インド学仏教学への誘いB（Ⅰ部）

インド学仏教学演習⑥（Ⅰ部）

インド哲学仏教学演習⑫（Ⅱ部）

宗教をめぐる諸問題B（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）一回担当
「中国における佛教の社会的意義 ― 唐代、人々は新興の禅に何を求めたか」（十一月七日、六時限）
校友会寄附講座（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）一回担当
「哲学館の後継者たちの活躍 ― 境野黄洋、高嶋米峰など」（十一月七日、五時限）
大学院：中国仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅳ（前期課程）
仏教学特殊研究Ⅲ・仏教学研究指導Ⅳ（後期課程）
＜大学・学部管理・運営活動＞
インド哲学科第Ⅰ部主任／文学部内資格審査委員会委員／東洋学研究所研究員
＜社会的活動＞
講座「禅と女性」、東洋大学生涯学習センター公開講座・エクステンション講座B＜東洋思想への誘い ― インド哲学・仏教のエッセンスを探る＞、平成二十一年十月七日、東洋大学白山キャンパス
講演「禪師的療效」（國際講演座談會）、平成二十一年十月三十日、新生醫護管理專科學校（中華民国、桃園市）行政大樓二樓會議室
財団法人東方研究会兼任研究員

山口しのぶ
＜論文＞
「『瓶護摩儀軌』翻訳研究」『東洋学研究』第四十六号、平成二十一年三月、八九頁 ― 一〇二頁）
＜学会活動＞
所属学会ならびに役職
日本印度学仏教学会（会員）／日本宗教学会（会員）／日本南アジア学会（会員）／日本佛教学会（会員）／密教図像学会（会員）／東海印度学仏教学会（会員）／パーリ学仏教文化学会（会員）
研究発表
「ネパール仏教の死者儀礼」（二〇〇九年度日本佛教学会学術大会、平成二十一年九月十六日、立正大学）
＜研究プロジェクトへの参加＞
「マハーラーシュトラ州におけるヒンドゥー教巡礼地の研究」（平成二十一年度科学研究費〔基盤研究（C）〕研究代表者）
＜教育活動＞
学内担当科目
学　部：インド学仏教学演習⑧（Ⅰ部）
チベット文献を読むA・B（Ⅰ部）
インド美術を見る（Ⅱ部）
チベット仏教のあゆみ（Ⅰ部）
インド・仏教図像学（Ⅰ部）

宗教学ⅡA・B（Ⅱ部）
宗教をめぐる諸問題A・B（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）コーディネーター
「宗教行為の諸相―開講にあたって」（四月十一日）
「宗教の社会的意義―開講にあたって」（十月三日）
大学院：大乗仏教研究Ⅱ・仏教学研究指導Ⅱ（前期課程）
仏教学特殊研究Ⅱ・仏教学研究指導Ⅱ（後期課程）
＜大学・学部管理・運営活動＞
インド哲学科第二部主任／文学部自己点検・評価委員会委員／東洋学研究所研究員
＜社会的活動＞
講座「光り輝くシヴァ神の十二聖地 ― 神話の世界を歩く」（東洋大学生涯学習センター公開講座・エクステンション学習講座B＜東洋思想への誘い4＞、平成二十一年六月二十日、東洋大学白山キャンパス）
講座「ヒマラヤの国の仏たち ― ネパール仏教の歴史と現在」（第六四五回浅草寺仏教文化講座、平成二十一年八月二十五日、明治生命ビル）

沼田一郎

＜論文＞
「vyavahāra 概念の変遷」（単著、『東洋学論叢』第三四号＜「東洋大学文学部紀要」第六二集＞平成二十一年三月三十日、九六～一〇五頁）
＜学会活動＞
所属学会ならびに役職
日本南アジア学会（会員・英文叢書委員会委員）／日本印度学仏教学会（会員）／日本佛教学会（会員）
研究発表
「Vyavahāra in the Dharma-literatures」（第一四回国際サンスクリット学会、平成二十一年年九月一日、京都大学）
＜調査活動＞
「現代サンスクリット語事情の調査」（九月十六日～三十一日、カルナータカ州シモガ県マットゥール）
＜研究プロジェクトへの参加＞
「東洋における聖地信仰の研究：ヒンドゥー教と仏教における聖地巡礼成立の要件」（平成二十一年度東洋学研究所プロジェクト、研究代表者：宮本久義［東洋大学］、研究分担者）
＜教育活動＞
学内担当科目
学　部：サンスクリット文献を読むA・B（Ⅰ部）
古代インドの社会（Ⅰ部）
インド学仏教学演習①（Ⅰ部）
インド哲学仏教学演習⑪（Ⅱ部）
インド古典哲学（Ⅱ部）
宗教をめぐる諸問題A・B（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）

二回担当
「ブラフマニズムにおける行為論 ―〈業〉の問題」（五月三十日、六時限）
「インド伝統法学における「社会」の位置付け」（十一月二十一日、六時限）

学外担当科目
東京大学文学部非常勤講師（学部・大学院「インド語インド文学特殊講義」）

〈大学・学部管理・運営活動〉
東洋学研究所研究員・運営委員／東洋学研究所『東洋学研究』編集委員／文学部予算委員会委員／文学部カリキュラム委員会委員

〈社会的活動〉
講座「シヴァ神が見下ろす氷の世界」（東洋大学生涯学習センター公開講座・エクステンション学習講座B〈東洋思想への誘い ― インド哲学・仏教のエッセンスを探る〉、平成二十一年五月二十三日、東洋大学白山キャンパス）

岩井昌悟

〈論文〉
「*Paṭhamasambodhi* 第一四章： Parinibbānakathā 訳注研究（1）」（単著、『東洋学論叢』第三四号〈「東洋大学文学部紀要」第六二集〉、平成二十一年三月三十日、八一～九五頁）
「釈尊雨安居地伝承の検証」（単著、『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究』、平成二十一年五月七日、九九～一三三頁）
「マーラの變容 ― 死魔から他化自在天へ」（単著、『印度学仏教学研究』第五八巻第一号、平成二十一年十二月二十日、三五九～三六四頁）

〈その他〉
「釈尊の生涯と教え」・「仏典の成立と部派仏教」・「アショーカ王とカニシュカ王」・「スリランカ仏教史」・「東南アジアの仏教」（単著、『大法輪』七月号〈特集 ― これでわかる仏教の歴史〉、平成二十一年六月八日、六〇、六一、六四、八〇、八一頁）

〈書評〉
竹村牧男『入門　哲学としての仏教』（講談社現代新書、平成二十一年四月二十日刊）、「じつはモダンな仏教の「知」」（単著、『在家仏教』七月号、平成二十一年七月一日、六八～六九頁）

〈学会活動〉
所属学会ならびに役職
日本印度学仏教学会（会員）／日本宗教学会（会員）／日本佛教学会（会員）／仏教思想学会（会員）／パーリ学仏教文化学会（普通会員）
研究発表
「マーラの変容 ― 死魔から他化自在天へ」、日本印度学仏教学

会第六〇回学術大会、平成二十一年九月八日、大谷大学

学会参加

日本宗教学会第六八回学術大会に参加、平成二十一年九月十一日～十三日、京都大学

＜研究プロジェクトへの参加＞

「東洋における聖地信仰の研究：ヒンドゥー教と仏教における聖地巡礼成立の要件」（平成二十一年度東洋学研究所プロジェクト、研究代表者：宮本久義［東洋大学］、研究分担者）

＜教育活動＞

学内担当科目

学　部：インド学仏教学演習⑤（Ⅰ部）

インド仏教のあゆみA・B（Ⅰ・Ⅱ部）

パーリ文献を読むA・B（Ⅰ部）

初期仏教の思想（Ⅱ部）

インド学仏教学演習⑩（Ⅱ部）

宗教をめぐる諸問題A・B（Ⅰ・Ⅱ部乗り入れ）

二回担当

「初期仏教教団の羯磨」（五月九日、六時限）

「世間と出世間」（十月十日、六時限）

＜大学・学部管理・運営活動＞

入試委員会委員／情報機器運営委員会委員／リーフレット委員／東洋学研究所研究員

＜社会的活動＞

講座「初期仏教の女性たち」（東洋大学生涯学習センター公開講座・エクステンション学習講座B＜東洋思想への誘い ― インド哲学・仏教のエッセンスを探る＞、平成二十一年十月三日、東洋大学白山キャンパス）

平成二十一年度演習ゼミ活動報告

沼田一郎

インド学仏教学演習①

①テーマ「インド古代史の基礎知識」

②メンバー　幹事：樺山祐（三年生）、（幹事を除く）四年生一四名、三年生九名、二年生一一名

③活動報告

今年度は『南アジア史1　先史・古代』（山川出版社）を講読した。古代史の概説としては最新の成果であるし、何より日本語文献であるので内容の理解とプレゼンテーションに重点を置くことができたと思う。何とかマウリヤ王朝まで進んだので、来年度も継続したい。このほかには研究発表と卒論指導がゼミ活動の柱である。前者については、三年生の段階から卒論を視野に入れた内容を要求するべきであると感じた次第である。後者の卒業論文については、できるだけ早い時期にテーマを発見すること、そしてそれについて教員との討論を通して深く掘り下げることを要求した。

今年度からの新しい試みとしては、「インド地誌」がある。これはメンバーが任意に選んだ州、都市等についての情報を最大限収集して報告するというものである。充実した発表もあったが、出所不明のウェブ情報や旅行ガイドに安易に頼る者もいたことは残念である。

宮本久義

インド学仏教学演習②

①テーマ「インド思想研究」

②メンバー　（春学期）幹事：籾山擁也、副幹事：塩澤花野、（幹事を除く）四年生一一名、三年生一〇名、二年生一一名、（秋学期）幹事：塩澤花野、副幹事：大川詩織、（幹事を除く）四年生一二名、三年生一〇名、二年生一〇名

③活動報告

本年度も昨年と同じく各班が年間を通して研究するテーマを決め、それに関連するサンスクリット原典あるいは外国語文献の一部を読解することを課題とした。哲学班は六派哲学の研究に取り組み、特にサーンキヤ学派、ヨーガ学派について、因中有果論など各論についても詳しく追究した。テクストは『ヨーガ・スートラ』を選び、冒頭部分をヴィヤーサの註釈とともに解読した。神話班はヒンドゥー教の聖地と神話をテーマとし、四大神領、カイラース、バナーラス、コナーラク、エローラなどの聖地とそこにまつわる神話の関係を探った。また「聖地とクリシュナ神話にまつわる女性達」など興味深い発表も行った。文化班は食文化を取り上げ、地方によるメニューや食習慣の違いや食事に関するタブー、さらに世界の他の食文化との比較も行った。文学班はインドの説話文学をテーマとし、『ヒトーパデーシャ』や『屍鬼二十五話』、

『鸚鵡七十話』などの中で、「財・実利」や「宗教」や「社会」がどう捉えられているかを追究した。今年度は四年生の卒業論文中間発表とともに、三年生、二年生にも各自の卒業論文（制作）に向けての中間構想を発表してもらうことにした。皆、興味のもてる研究対象を必死に見つけようとする過程で、多くのテクストや参考文献に当たり、教員の期待に応えてくれた。

夏期の研修合宿は八月二十日から二十二日まで、富士見高原セミナーハウスで行った。授業期間中とは違って、時間をかけて準備された班発表は質・量ともに聴きごたえがあり、またゼミ生間の親睦を深めることができた。

橋本泰元

インド学仏教学演習③

①テーマ「ヒンドゥー教思想研究」

②メンバー　ゼミ長：松本惠利子（三年生）、副ゼミ長：小山德子（三年生）、他四年生八名、三年生（正副ゼミ長を除く）八名、二年生八名

③活動報告

昨年度に引き続き、初めの数回で本ゼミの授業の主旨、資料概説、卒業論文を視野に入れた論文執筆方法などを講義した。そのなかで、大勢のゼミ生を、それぞれの関心に従って大きく思想班（ヒンドゥー教思想）、神話班、儀礼班（ヒンドゥー教民間儀礼）、文化班（ヒンドゥー教女神信仰）の四班に分けた。

これらの班は昨年度をほぼ継承しているので、各班における発表とレジュメの作成などの提示方法も徐々によくなってきたと思う。しかし、昨年度の反省点と同じであるが、参考資料のほとんどが邦文文献であり、ヒンドゥー教に関わる原典を読み資料を批判的に読むという訓練になかなか取り組めなかった。ただ、今年度は、David Kinsley, *Hindu Goddesses* というヒンドゥー教女神研究の古典的名著の輪読を再開することができ、また発展しつつあるインド巨大企業の背景をなす宗教的倫理観を探る個人発表が行われ、さらにヒンドゥー・ナショナリズム再考などに関する非常に意識の高い発表もあり、喜ばしい傾向であった。

この自主的研究発表と平行して、四年生の卒業論文あるいは卒業制作の中間発表も行った。四年生の半分は夏期研修合宿にて行った。今年度も、参加者数が多かったせいか大学セミナーハウスに予約できず、今年度は八王子にある大学セミナーハウスにて九月二十四日～二十六日の二泊三日で充実した夏期研修を行えた。

渡辺章悟

インド学仏教学演習④

①テーマ「大乗仏教の研究」

②メンバー　幹事：山本耕平（四年生）、上田智仁（三年生）、（幹事を除く）四年生三名、三年生七名、二年生三名

③活動報告

本ゼミは大乗仏教の研究をテーマとするが、その分野はインド・

中国・日本と広く捉え、分野を限定せずに多様な視点から仏教研究を行うことを目指している。ゼミの進め方は、毎回特定のテーマを決めて各自が研究発表を行う方法をとっている。これは学生の意欲的な研究活動を促進するためであり、調査し、纏め、発表するという訓練を兼ねている。

本年も最初に担当者が運営方針やら大乗仏教の概要を説明し、その後にはすでに経験のある四年生と三年生から実際に個人研究を中心とした研究発表を行った。今年のゼミは構成人数からいって三年生が主体であり、昨年度の経験もあるので、発表については問題ないと考えていたが、まだまだ纏め方、ハンドアウトの作り方などが未熟で、学科で纏めた研究発表の仕方の資料などを参考にして、何度か指導しながら進めた。本ゼミの方法からして、どうしても全体としての研究が散漫になる傾向があるが、これは今後の課題である。

また、発表は個人差が甚だしく、学習意欲の差が如実に表れるものである。自分の発表以外は関心を持たず、欠席しがちなゼミ生も少なからずいたのは残念である。

夏休みの合宿はインフルエンザのために当局から指導があり、急遽中止となった。夏合宿はゼミ生相互の距離を近づける最も良い機会であったのに残念であった。

いずれにせよ、今年のゼミの反省を来年に活かして、来年はもう少し実りあるゼミ活動にしたいと切に念願している。

岩井昌悟

インド学仏教学演習⑤

①テーマ「原始仏教研究」

②メンバー　（春学期）幹事：小倉麻由（四年生）、（幹事を除く）四年生一名、三年生六名、二年生二名、（秋学期）幹事：吉田泰斗（三年生）、（幹事を除く）四年生二名、三年生五名、二年生二名

③活動報告

本年度も昨年度を踏襲し、最初に指導教員が原始仏教聖典について概説し、その後は、卒業論文・卒業制作を視野に入れた「個人研究」と、ゼミ生全員による「共同研究」の二本立てとし、個人研究の報告が一巡したら、共同研究の発表に移り、それが終わるとまた個人研究に戻るという形で、両研究を交互に進めた。なお「共同研究」とはいっても各人が主体的に同一テーマにとりくむ形であり、グループ別の研究ではない。

本年度に設けた共同研究テーマは「原始仏教における自発性・能動性の評価」というものであった。この問題を明らかにすべく、各ゼミ生が分担（南伝大蔵経で一人三～四冊）してパーリ聖典を翻訳によって読み進め、毎回読んだ箇所から共同研究テーマに関連するなんらかの発表を行った。翻訳を通してでも、とにかく聖典に直接触れてもらいたいという意図が指導教員側にあり、その点は達成できたであろう。

課外活動は四月二十四日に新ゼミ生歓迎コンパを行った。夏期

合宿については、残念ながらセミナーハウスの選にもれたため、九月二十七日に大学内で発表会を行い、終了後にコンパを行った。発表会は四年生の卒論中間報告が中心であるが、三、二年生にも個人研究の発表をしてもらった。

四年生二人が卒業論文を提出した。小倉麻由さんの「原始仏教聖典に於ける釈尊の臨終」が東洋大学校友会学生研究奨励基金・学生研究奨励賞を受賞した。

伊吹　敦

インド学仏教学演習⑥

①テーマ「禅思想研究」

②メンバー　幹事：加藤佳樹（四年生）、（幹事を除く）四年生三名、三年生五名、二年生三名

③活動報告

本年度は、前期は昨年度に続き『正法眼蔵随聞記』、後期は『宝慶記』をそれぞれ輪読した。いずれも、テキストを適当に区切り、担当者を決めて、各自作成したレジュメに基づいて発表をしてもらった。

『正法眼蔵随聞記』は、道元の弟子、懐奘が師の説示を記録したものであるが、道元の禅思想のみでなく、興聖寺時代の初期曹洞宗教団の実態を伝えるという点で極めて興味深いテキストである。そのため、禅思想が歴史の中でどのような意味をもったか等を考えながら授業を進めた。その点では、多少なりとも成果はあったと思う。

ただ、学生の取り組みは必ずしも充分ではなく、解説本をそのままコピーしたようなレジュメがしばしば見られた。演習では、自分で読み、考える力を養うべきなのだが、なかなか改善が見られなかったことは残念である。

卒論指導は随時行ったが、学生の取り組みは決して十分でなく、できあがった卒論も、問題点の多いものが目立った。卒論指導をもっと組織的・計画的なものとして、一定の水準に保つ必要性を痛感した。

課外活動としては、学生の希望に沿って、夏季休暇中に東京国立博物館を訪れた。来たことのある学生が極めて少ないのに驚いたが、いい経験になったものと思う。

竹村牧男

インド学仏教学演習⑦

①テーマ「平安時代までの日本仏教の思想について」

②メンバー　幹事：尾鼻源太（四年生）、副幹事：高橋侑子（三年生）、（幹事を除く）四年生九名、三年生五名、二年生六名

③活動報告

本年度は、「平安時代までの日本仏教の思想について」をテーマにゼミを行った。ただし四年生は、卒論研究を優先し、卒論のテーマで発表をしてもらった。初めに私（竹村）が三回ほど講義を行い、ついで四年生の卒論構想発表を行った。三年生・二年生

は、テーマに沿っての発表であり、人数が少なくなったこともあって、発表回数は夏季のゼミ合宿の自由発表を含め、春学期・秋学期合わせて三回行ってもらった。発表内容は、聖徳太子の『十七条憲法』と源信の『往生要集』についてが比較的多く、さらに空海や覚鑁などについての発表もあった。特に二年生は準備もよく、大変しっかりした発表をしてくれて、今後に大いに期待が持てた。一方、三年生は発表に慣れてきたはずなのに、あまり進歩が見られない場合もあったのは残念であり、一段の精励が期待される。秋学期末には発表がほぼ終了したので、再び私が法然・親鸞の浄土教について講義を行った。

年間の行事として、四月には歓迎コンパを行い、夏休みには鴨川のセミナーハウスで二泊三日のゼミ合宿を行なった。参加者は九名（四年生三名、三年生二名、二年生四名）であり、二日に分けてそれぞれ自由研究発表を行ったほか、鴨川シーワールドに遊ぶなどした。また、二日とも夕食後の懇談会では大いに懇親を深めた。私は、来年度以降、しばらくゼミを離れることもあり、私にとっては印象に残る合宿となった。今回、特に三年生の出席者が少なかったことは残念である。一月、新年会を行い、三月には追い出しコンパを予定している。

山口しのぶ

インド学仏教学演習⑧

①テーマ「密教研究およびインド・仏教美術の研究」

②メンバー　幹事：田中　美香（三年生）、（幹事を除く）四年生八名、三年生一二名、二年生一一名

③活動報告

本年度春学期はサンスクリットの文献講読、秋学期は個人発表を中心にゼミを進めた。春学期においては、中期密教経典の代表である『金剛頂経』第一章「金剛界品」を講読した。学生が順番に翻訳箇所を分担し、和訳のプリントを事前に各自用意して、授業中はサンスクリット・テキスト、津田真一氏の和訳を参照しながら翻訳作業を行った。またテキストの成立過程や背景となる知識等について、随時担当教員が説明を行った。日本密教においても基本とされ、またネパール、チベット等でも重要視されているのでこのテキストを選択したが、実際予習をして読み進めていくと、説明する箇所が多く、講読としての量は少なくなりがちであった。しかしながら、本ゼミでは昨年度よりサンスクリット・テキスト講読をはじめたので、三年生以上の学生たちは学習方式に慣れており、新しく始めた二年生も各自努力して、ある程度の訓練になったものと思われる。

秋学期は、各自で興味のあるテーマを決定し、口頭発表を行った。四年生は卒論のテーマに沿って発表を行った。本ゼミでは仏教図像、美術に興味を持つ学生たちが多く、仏像の様式の研究、立体曼荼羅の成立過程等の発表が多かった。そのほかに、チベット仏教のダライ・ラマに関する発表、密教の観想法、女神信仰等に関する発表等なども行われた。今年度特筆すべき点は、現地調

査の成果報告がなされた事である。内容は、タイの仏教美術、インドのチベット文化圏における動物の信仰、タイの仏教教団によるターミナル・ケアの実態の三件であり、今後この種の発表が増えていくことを期待したい。

また平成二十一年九月七日から九日まで、群馬県水上でゼミ合宿を行い、四年生の卒論中間報告および付近の散策等を行った。

宮本久義

インド学仏教学演習⑨（Ⅱ部・二年生）

①テーマ「インド思想・文化の研究」

②メンバー　幹事：大森崇気、副幹事：櫻井美佳（幹事を除く）二年生四名、四年生二名

③活動報告

ゼミ生の人数が少ないので班分けはせず、ヒンディー語入門の授業と、各自が卒論に向けて、今関心のあるテーマを選んで発表してもらう二本立てで進めることとした。それぞれが最初に選んだテーマは、「インドの民族衣装」、「欲」、「ヨーガについて」、「インド古典芸術」、「インドの昔話について」、「ネパールにおける儀礼」、「アーユルヴェーダと食事療法について」である。回を重ねるにつれて、ヨーガをテーマとした学生は「瞑想について」、民族衣装の学生は「サーリーの種類について」、ネパールの儀礼に取り組んだ学生は「生き神クマリについて」というように、問題意識の深化が見られた。発表者は出席者のコメントを聞くことにより、自分の発表のどこが良かったか、説明不足の点はどこかがわかるので、積極的に質疑応答をするようにした。ヒンディー語はまずデーヴァナーガリー文字を覚えることからはじめ、過去形まで進めることができたが、語学授業の常として、欠席した学生をどうフォローしていくかが難しかった。

夏期の研修合宿は八月二十四日から一泊二日で、富士見高原セミナーハウスに行った。インフルエンザに罹った学生を除いて普段出席している学生全員が参加したので、こういう時は少人数ゼミの良さを感じることができた。

岩井昌悟

インド学仏教学演習⑩（Ⅱ部・二年生）

①テーマ「仏教学分野」

②メンバー　幹事：沖殿祐貴（二年生）、（幹事を除く）二年生一〇名、三年生一名、四年生七名

③活動報告

春学期は舎利弗、目連をはじめとする「仏弟子たちの多彩さ」を共通のテーマとして設定し、各自仏弟子一人を分担し、研究発表を行った。特に各仏弟子のパーリ名・サンスクリット名・漢訳名、出家の動機、入滅の様などに焦点を当てるよう促した。秋学期は自由テーマで個人研究発表を行った。全員が春学期と秋学期にそれぞれ一回ずつ発表を行った。

一年間を通してレポート作成方法の指導が主であり、内容的な

ことにはほとんど踏み込むことができなかったが、昨年度からの問題点として、ゼミ生が自ら選ぶ参考資料の質が悪く、良書を参照する学生が少ないこと、また剽窃にならないよう、典拠をきちんと挙げ、参考資料を複数用いることを義務付けると、発表が単なる複数の資料のパッチワークになってしまい、独自の文脈をつくることができないことなどがあったが、本年度は担当教員が事前に参考資料に限定を設けたり、研究方法に関してアドヴァイスを与えたりなどして改善に努めた結果、いくつか優れた発表もあった。

沼田一郎

インド哲学仏教学演習⑪（Ⅱ部・三～四年生）

①テーマ「インド思想研究」

②メンバー　幹事：山崎可菜絵（三年生）、（幹事を除く）四年生八名、三年生一名

③活動報告

昨年に続いて参加者は少ないが、問題意識が明確で、「ゼミ」としてあるべき姿と言えよう。個人発表が中心であり、それに基づいた卒業論文はいずれも高い水準である。質疑応答も活発であり、卒論の質を高めるのに大きく貢献した。優秀論文が複数出たのも当然と言えるかもしれない。三年生のうち一名は来年度卒業論文に挑戦する意向であり、成果が期待される。サンスクリットの講読ではランマンの読本を用いた。

伊吹　敦

インド哲学仏教学演習⑫（Ⅱ部・三～四年生）

①テーマ「禅思想研究」

②メンバー　幹事：大滝彩加（四年生）、（幹事を除く）四年生六名、三年生六名

③活動報告

本年度は、昨年度に続き、『正法眼蔵随聞記』をテキストに輪読を行うとともに、卒論の進捗状況を把握するために発表会を定期的に開き、論文指導を充実させるよう努めた。

そのかいあってか、完成した卒論はなかなかすぐれたものが多く、結果として二名が賞の対象となった。また、『正法眼蔵随聞記』を研究対象とする卒論も二篇見られ、テキストの輪読がそれなりの成果を挙げたことを実感することができた。

ただこれは、このテキストの特性、即ち、単に禅思想そのものを表現するのみでなく、社会との関係という歴史的な側面をも伝えているという点に負うところが大きいようにも思える。今後も、こうした多面的な考察を可能にする素材を積極的にテキストに選んで行くつもりである。

課外活動としては、コンパを行った程度であった。合宿などもできればよかったが、諸般の事情のため果たせなかったのは遺憾である。

平成二十一年度開講科目

・授業名、サブタイトル、担当者の順に記す。
・平成二十一年度以降の新カリキュラムと平成二十年度以前の旧カリキュラムの間で、授業の名称に変更があったものについては、新カリキュラムの名称を掲載した。
・通年科目はA（春学期）・B（秋学期）に分かれるが、担当者が同一であり、かつ、サブタイトルが春秋通じて同一の場合、その区分は省略して記した。
・ただし、半期のみの授業については《春》《秋》と表記した。
・担当者および《春》《秋》の授業区分に付したカッコ内の数字は、それぞれⅠ部・Ⅱ部の区別を示す。カッコが付されていないものは、Ⅰ部Ⅱ部隔年開講の科目か、Ⅰ部・Ⅱ部の担当者が同一であることを示す。

〈学部〉（五十音順）

イスラームとは何か《秋》（イスラームのとらえ方）　後藤　明
インド学仏教学への誘いA（インド学分野）　橋本泰元（Ⅰ）
インド学仏教学への誘いA（仏教研究入門）　渡辺章悟（Ⅱ）
インド学仏教学への誘いB（インド学分野）　渡辺章悟（Ⅱ）
インド学仏教学への誘いB（仏教研究入門）　伊吹　敦（Ⅰ）
インド現代思想《春》（インド近・現代の宗教思想家）　宮本久義
インド古典哲学（インド古典哲学概説）　沼田一郎（Ⅱ）
インド古典哲学（インド思想史）　宮本久義（Ⅰ）
インド学仏教学演習①（インド古代史の基礎知識）　沼田一郎（Ⅰ）
インド学仏教学演習②（インド思想研究）　宮本久義（Ⅰ）
インド学仏教学演習③（中世ヒンドゥー教思想研究）　橋本泰元（Ⅰ）
インド学仏教学演習④（インド大乗仏教の研究）　渡辺章悟（Ⅰ）
インド学仏教学演習⑤（初期仏教研究）　岩井昌悟（Ⅰ）
インド学仏教学演習⑥（禅思想研究）　伊吹　敦（Ⅰ）
インド学仏教学演習⑦（日本仏教の人間観・世界観）　竹村牧男（Ⅰ）
インド学仏教学演習⑧（密教研究およびインド・仏教美術の研究）　山口しのぶ（Ⅰ）
インド学仏教学演習⑨（インド思想研究）　宮本久義（Ⅱ）
インド学仏教学演習⑩（仏教学分野）　岩井昌悟（Ⅱ）
インド哲学仏教学演習⑪（インド思想研究）　沼田一郎（Ⅱ）
インド哲学仏教学演習⑫（禅思想研究）　伊吹　敦（Ⅱ）
インドの芸能《春》（インド芸能の多様性 ― その中心と周縁）　小西公大
インドの宗教A（ヴェーダの宗教と反ヴェーダ的自由思想）　橋本泰元
インドの宗教B（反ヴェーダ的自由思想とヒンドゥー教諸思想の

展開）　橋本泰元
インドの風土と文化《秋》（造形をめぐるインドの歴史と文化）　石川　寛
インド美術を見る《秋》（インドの仏と神々）　山口しのぶ
インド・仏教図像学《春》（Ⅱ）・《秋》（Ⅰ）（仏、神々の姿とその意味）　山口しのぶ
インド仏教のあゆみA（釈尊の覚りとその展開）　岩井昌悟
インド仏教のあゆみB（大乗仏教とは何か）　岩井昌悟
インド舞踊《秋》（インド舞踊バラタナーティヤムの実技と理論）　久保田幸代
インド文学《春》（Ⅰ）・《秋》（Ⅱ）（ヴィンディヤ山脈の頂きからインド文学を見る）　高橋孝信
キリスト教とは何か《春》（キリスト教の誕生とその背景）　山中利美
華厳の思想《春》（華厳経の思想と文化）　金本拓士
現代に生きる仏教《春》（現代の社会問題解決に積極的にかかわる「Engaged Buddhism」について、日本・東南アジア・米国などの仏教者の事例を学び、現代における自己および仏教の社会的役割を共に探求する）　戸松義晴
現代のインド《秋》（インド近・現代の政治思想家）　宮本久義
古代インドの社会《春》（古代インドの社会）　沼田一郎
坐禅のこころ《春》（体験！禅心理学ワークショップ）　松竹寛幸
サンスクリット文献を読むⅠ（古典サンスクリット入門）　沼田一郎（Ⅰ）
サンスクリット文献を読むⅡ（十二支縁起を学ぶ）　計良隆世（Ⅰ）
サンスクリット文献を読む（古典サンスクリット初級文法）　渡邉郁子（Ⅱ）
社会と宗教A（近現代の日本社会と宗教）　住家正芳
社会と宗教B（現代世界と宗教）　住家正芳
宗教科教育論《春》（宗教と教育について）　成瀬良徳（Ⅰ）
宗教学ⅡA（アジア宗教の歴史と特色）　山口しのぶ（Ⅱ）
宗教学ⅡB（宗教の諸概念とアジア宗教の理解）　山口しのぶ（Ⅱ）
宗教科指導法Ⅰ・Ⅱ（「宗教科」の教育と指導）　成瀬良徳（Ⅰ）
宗教間の差異と対話　星川啓慈
宗教とは何か　渡辺浩希
宗教をめぐる諸問題A（宗教における行為の諸相）〈オムニバス形式〉　山口しのぶ
宗教をめぐる諸問題B（宗教の社会的意義）〈オムニバス形式〉　山口しのぶ
初期仏教の思想《春》（すべては解脱のために）　岩井昌悟（Ⅱ）
禅の思想《春》（禅思想の形成と社会との交渉）　伊吹　敦
大乗仏教の思想Ⅰ《春》（空の世界に何があるのか）　渡辺章悟
大乗仏教の思想Ⅱ《秋》（唯識思想論）　橘川智昭

チベット仏教のあゆみ《春》（チベット仏教史における思想と文化）　山口しのぶ
チベット文献を読むA（古典チベット語文法の学習）山口しのぶ
チベット文献を読むB（チベット語仏教経典の翻訳練習）　山口しのぶ
中国仏教のあゆみ（中国仏教の変遷）　伊吹　敦
朝鮮仏教史《春》（Ⅰ）・《秋》（Ⅱ）（朝鮮（韓国）仏教に対する理解を深める）　佐藤　厚
哲学概論（知は何を目指したのか—西洋哲学と仏教—）　渡邉郁子（Ⅱ）
天台の思想《秋》（天台の思想）　大久保良峻
東南アジア仏教のあゆみ《秋》（東南アジア諸国における宗教政策の歴史を概観する。）　藪内聡子
東洋思想A（東洋の倫理思想—チベットの倫理思想を中心として—）　島田茂樹（Ⅱ）
東洋思想B（東洋の倫理思想—神秘主義（タントリズム）を中心として—）　島田茂樹（Ⅱ）
日本の思想《春》（Ⅱ）・《秋》（Ⅰ）（古代・中世の宗教文化）　伊藤　聡
日本仏教のあゆみA（日本仏教思想の歩み）　竹村牧男（Ⅰ）
日本仏教のあゆみA（日本仏教の思想—仏教伝来から鎌倉時代まで）　佐藤　厚（Ⅱ）
日本仏教のあゆみB（日本仏教の歩み・近世から近代）　西村　玲（Ⅰ）
日本仏教のあゆみB（日本仏教の思想—室町時代から近代まで）　佐藤　厚（Ⅱ）
念仏の思想《秋》（念仏の思想の特性を理解する）　本多静芳
パーリ文献講読A（パーリ語文法講座）　岩井昌悟
パーリ文献講読B（聖典を直に読む）　岩井昌悟
ヒンディー文献を読む（ヒンディー語を学んでインド世界へ）　橋本泰元
ヒンドゥー教とは何か《秋》（ヒンドゥー教の特徴を探る）　橋本泰元
仏教古典哲学（仏教の基礎的な用語とその背景を学ぶ）　米澤嘉康（Ⅰ）
仏教と現代福祉《秋》（仏教の行ってきた社会福祉事業の歴史的展開とその役割について検証し、現代に必要とされる仏教的な社会福祉のあり方を共に提言する）　戸松義晴
仏教の芸能《秋》（仏教伝統歌謡の基本を学び実修してみよう）　橋本泰元
仏教文献を読む　橋川智昭（Ⅰ）
仏教文献を読む（人間の根源は何か?—宗密『原人論』の講読）　佐藤　厚（Ⅱ）
ブッダの思想とその展開A（仏教とは何か）　渡辺章悟
ブッダの思想とその展開B（仏教の思想とその展開）　渡辺章悟
密教の思想《秋》（密教の思想と文化）　金本拓士

ヨーガとアーユルヴェーダ《春》（インドの叡智を探る）　宮本久義
ヨーガのこころ《春》（実践をとおして思想を学ぶ）　番場裕之

＜大学院＞

博士前期課程

インド哲学研究Ⅰ　デレアヌ・フローリン
インド哲学研究Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅲ　橋本泰元
インド哲学研究Ⅲ　永ノ尾信悟
サンスクリット文献研究Ⅰ・インド哲学研究指導Ⅰ　宮本久義
初期仏教研究Ⅰ　下田正弘
初期仏教研究Ⅱ　三友健容
大乗仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ　渡辺章悟
大乗仏教研究Ⅱ・仏教学研究指導Ⅱ　山口しのぶ
大乗仏教研究Ⅲ　齋藤　明
中国仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅳ　伊吹　敦
日本仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ　竹村牧男
日本仏教研究Ⅱ　大久保良俊

博士後期課程

インド哲学特殊研究Ⅰ・インド哲学研究指導Ⅰ　宮本久義
インド哲学特殊研究Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅱ　橋本泰元
仏教学特殊研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ　渡辺章悟
仏教学特殊研究Ⅱ・仏教学研究指導Ⅱ　山口しのぶ
仏教学特殊研究Ⅲ・仏教学研究指導Ⅳ　伊吹　敦
仏教学特殊研究Ⅳ・仏教学研究指導Ⅲ　竹村牧男

平成二十一年度卒業論文

〈Ⅰ部〉

荻原　克敏　ラーマーヤナの伝承
髙梨　　塁　ガンジーの人生と非暴力主義
大石貴里子　小説『一周忌』
藤原　聡之　『無門関』における悟りと公案の関係について
近藤　哲彦　夢窓疎石の人と思想
中村　　鮎　ヒジュラに見るマイノリティー社会の変容と異文化認識
佐久間有紀　三つの舞踊からみる文化の比較　～バラタ・ナーティヤムは、西洋と東洋の交差点たりえるか～
那須　信行　親鸞と信心　―『正信偈』に説かれる信心の研究―
青砥　容美　化身、ヴィシュヌ神　―ヴィシュヌの10化身とその神話―
三田村誠也　東寺講堂の立体曼荼羅の研究　仁王経曼荼羅との比較を中心として
深谷　悦子　強国マウリヤ朝の仕組みと謎　―王の行動と変化―
下田　忠明　インド音楽について
山田慎太郎　インドにおける学校教育制度
篠田　陽子　ヒンドゥー教における水の観念
山本　泰子　インド古典哲学の底流を探る
深澤　俊子　詩人タゴールのインド思想
中西　太河　インドの環境問題と環境倫理
関　茉莉子　ミティラー画の制作　『ラーマーヤナ』より「ラーヴァナによるスィーターの誘拐」の場面
増田　幸子　チベットの曼荼羅
田中雄一郎　加賀の一向一揆から見るその課程と構造
吉原　麻由　七福神における弁才天とサラスヴァティー
中村奈津子　仏師の移り変わり―運慶の名声について―
松原　拓家　ヒンドゥー・ナショナリズムの構築する境界
山本　耕平　初期経典の実践　―念から八聖道まで―
池田　翔平　水問題　―インドの水事情を中心に―
渡邉　　慧　脳死と臓器移植　―仏教からの見解―
糟谷　千恵　日本仏教説話内の「蛇」と「女」の関係　道成寺と摩登伽経
藤井　貴宏　原始仏教における善悪の基準について
宮田紗弥香　日本に伝わるアーユルヴェーダ　～美容業界の実態を探る～
長谷川裕太　アジア地域の竜の思想比較　～竜を通じて見える思想～
藤浪　崇裕　『蘇婆呼童子請問経』の漢文原典の和訳に挑戦する
髙島百合香　古代インドにおける死後の儀礼と相続の研究
澤野祐太朗　ビートルズとインド
尾鼻　源太　正法眼蔵における言葉と認識

籾山　擁也　インドにおけるエロティシズムの考察
飯島　慎　スポーツ選手のためのヨーガ・コンディショニング法
河中　綾美　インドにおける樹木・植物崇拝と薬用植物の関連性について
大久保沙和　カシミール問題から見るインド・パキスタンの関係
小倉　麻由　原始仏教聖典に於ける釈尊の臨終
宮澤　真一　不可触民解放運動及び新仏教運動について　―アンベードカルの生涯を中心に―
髙橋　洋平　アジャンター壁画に見られるジャータカについて
福村　玲美　チベット死者の書について
山口　浩司　インドにおけるヒジュラ　―ヒジュラはシャーマンであるのか？―
丸山　卓哉　国家社会主義の綱領　―仏教国教化の草案―
伊藤　弘基　弘法大師空海の出家と平安時代の大学寮
関口　定子　終末期医療と仏教
加藤　佳樹　最澄と空海の交友と決別について

〈Ⅱ部〉

島田緒理絵　能登の頓成　―異安心という名の高僧―
髙山　玲子　『バガヴァッド・ギーター』における解脱論　―トリグナ説を中心に―
須藤美喜子　儀礼あるいは生活にみるネパール女性　―ヒンドゥーの社会規範は普遍的か―
深津　悦子　三階教の救済事業における思想基盤　―無尽蔵院を中心に―
湯口　翠　『支那革命外史』にみる日蓮の影響
大滝　彩加　マンガで表現する日本仏教
安東　裕美　『正法眼蔵随聞記』に見られる道元の学道姿勢とその教授法
若林　学　『実利論』と『マヌ法典』の比較研究　―王権を中心として―
駒井　功　『正法眼蔵随聞記』にみる道元の栄西観
森下　徳子　インド細密画におけるシンボリズムと思想

大学院修士論文

狩野　久枝　ガーンディーの思想と行動　―南アフリカ時代を中心に
藤森　晶子　ネパール仏教における七種無上供養の研究
永田　道子　聖武天皇の仏教思想　―東大寺盧舎那大仏造顕をめぐって
朝日　透　一遍上人の思想と衆生利益

東洋学論叢 第35号
（東洋大学文学部紀要 インド哲学科篇 第63集）
平成二十二年三月三十日 印刷
平成二十二年三月三十日 発行 ［非売品］
発行所 東洋大学文学部
東京都文京区白山五―二八―二〇
電話 インド哲学科〇三（三九四五）七三五七
印刷 ヨシダ印刷株式会社
東京都墨田区亀沢三―二〇―一四
電話 〇三―三六二六―一三〇一

BULLETIN OF ORIENTOLOGY

Bulletin of the Faculty of Letters
Toyo University
NO. 63
March, 2010
Series of
INDIAN PHILOSOPHY
XXXV

CONTENTS

IBUKI, Atsushi : A Biographical Study of the Main Members of the East Mountain Teaching (Part Two)……(1)

IWAI, Shogo : A Study of *Paṭhamasambodhi* : Japanese Translation and Notes of Parinibbānakathā (Part Two)……(136)

NUMATA, Ichiro : A Glimpse of Contemporary Sanskrit —Mattur Village in Karnataka……(147)

HASHIMOTO, Taigen : A Study of the Gorakhnāth's *Bānī* : Text, Japanese Translation and Notes of *sabadī* 151-276……(176)

Published by
TOYO UNIVERSITY
Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo